

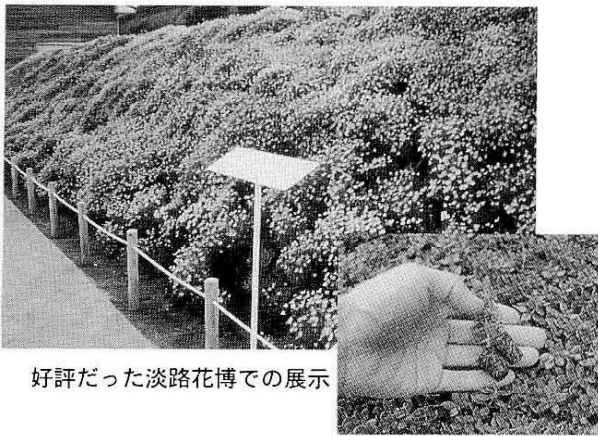
普及情報

バイオ・セル・ショット苗の本格生産始まる

1999年の春に、北部農業技術センターからバイオ・セル・ショット工法実演会の苗生産の依頼を受けて以来、篠山普及センターでは生産者と共に、その年の9月から大量生産に取り組んでいる。2000年2月には篠山バイオセル研究会を設立し、同年11月には工法の窓口となる㈱テクノアシストと委託契約を結び、本格生産を開始している。

1 注目されるバイオ・セル・ショット工法

この工法は、1999年に北部農業技術センターと民間企業(株式会社大本組、吉田建設株式会社)が共同開発した特許のある緑化工法である。専用トレイで育成したグラウンドカバープランツの苗を専用の吹付け機械で混合攪拌し、法面等に吹付けて緑化する。この吹付け工法により、大幅な省力化や手植えできない場所への植栽が可能となる。



好評だった淡路花博での展示

良質なバイオセル苗

2 生産技術の確立を目指して

技術確立に当たり、試験研究、民間企業、普及センター、生産農家が一体的に取組を行ってきた。

特に、苗生産の受け皿となる篠山バイオセル研究会では、月1回の定例会を持ち、生産した製品に対しての問題点や改善点、今後の生産計画や生産技術の工夫等について話し合っている。

例えば、栽培技術の統一を図るためさし穂の写真

つき栽培ごよみを作成したり、3月納品に向けての加温設備の導入を行っている。

生産を開始した当初は、夏場の生産で病害虫が発生し、契約数量を確保するのに苦労した。また、良質な苗ができたものの、うまく根鉢が固化しない等の事態も起こった。納品日に合わせた生育コントロールや新品目の開発も今後の課題である。

こうした問題点や課題は、普及センターや普及指導室、技術センターと連携をとり、課題解決を図っている。現在では、こうした取組のほか、会員個々が工夫し、その成果を共有することにより、安定した生産ができるようになってきている。

3 今後の方針

これまでの施工数は全国で22箇所40,000㎡になった。今後も多くの施工が予定されており、バイオ・セル・ショット工法は、急速に普及してきている。普及センターでは、この工法が新しい兵庫の緑化産業に発展し、この苗生産を基幹とした何人もの経営体が育って欲しい、と願っている。

そのためには、現状の品目や生産技術に満足することなく、生産者側からの新しい素材への提案や周年生産技術の確立、県下の各生産組織の横の連携が必要だと考え、今後も支援していく計画である。

三宅 元一(篠山普及センター)



県下でいち早く結成された篠山バイオセル研究会